

最優秀賞

東京都立日比谷高等学校 一年

桐生 莉緒

語り継ぐ過去の過ち惨劇を兵器が朽ちて花宿るまで

優秀賞

埼玉県立伊奈学園総合高等学校 二年

滝澤 昂希

一画を足せば「辛」さは「幸」せにそうだと信じて踏み出す一步

福岡・西日本短期大学附属高等学校 三年

鶴本 彩花

私の名忘れた祖母の手を握り「大好きだよ」と小声で伝える

佳作

福岡・西日本短期大学附属高等学校 三年

黒田 陽嵩

幼くして逝きたる兄の墓参り合掌解かぬ母の暮れゆく

神奈川・聖ヨゼフ学園高等学校 三年

安村 玲美

人々は四角の画面見続けて人間らしさ捨てたみたいだ

大分県立爽風館高等学校

岸本 恵美

人型のロボットあふるる近未来涙腺あれば多分人間

群馬県立太田高等学校 一年

高草木 佑弥

「おかえり」と家族の帰りを永久とわに待つ割れた鏡の幼き手形

千葉県立安房高等学校 二年

保田 千奈

朝7時掛け声響く光る海ライフセーバー気合いを入れる

入選

千葉県立安房高等学校 二年

黒川 琴音

人々はつながり合って生きていく結び合わせた星座のように

埼玉県立浦和第一女子高等学校 一年

南 花瑠乃

代替品なんてないからその命悔いのないようもつと輝け

岡山県立岡山城東高等学校 二年

土屋 文彦

帰宅して母の部屋から聞こえてるミシンの音に心やすらぐ

千葉県立安房高等学校 二年

加瀬 詩織

家の中思わぬ所にそよ風が涼しむ場所は猫に教わる

東京・クラーク記念国際高等学校 東京キャンパス 二年

唐澤 智行

忘れない忘れぬようにくり返し原爆の歌今年も歌う

福岡・西日本短期大学附属高等学校 三年

辻 菜々子

祖母の家泊まりに行ったお正月布団の厚さは愛の大きさ

沖縄県立真和志高等学校 一年

廣井 陽一

校舎を出て初めて気付く時雨には僕の心が溶けていたんだ

埼玉県立上尾南高等学校 三年

千味 祐人

見えないところで汗流す人を尊敬する世界は貴方らに支えられてる

大阪市立咲くやこの花高等学校 三年

駒谷 遥也

ラムネ瓶閉じ込められたビー玉は君の瞳に少し似ていた

宮城・常盤木学園高等学校 一年

高橋 凜

震災後七年ぶりの海開きみんなの笑顔は平和の象徴

短歌の部選評

歌人

田中 章義

北海道から沖縄まで全国から四千二百首もの作品が寄せられた今回。入選歌以外にも注目した作品が多かったため、今年は初めて短歌部門の「百人一首」を選考してみました。

紙幅の許す限り、何首かを紹介してみたいと思います。都道府県名は学校のある住所での紹介です。

「白線を踏まないように登下校道無き道を僕は行きたい」(神奈川県・松長諒)、「祖母の手が立てる線香ほっそりとされど真つ直ぐ祖父と向き合う」(千葉・池谷璃穂)、「唯一という字をみんな臨書する午後の冷房効きすぎている」(福岡・雪吉千春)、「一日がJアラートで始まった恐怖で目覚める未来は嫌だ」(新潟・眞島幸音)、「阿波っ子は寝ても冷めても阿波踊り今夜もくりだせ紺屋町」(徳島・船越麻由)、「農作業何だか暑さを忘れそういつしよに笑う祖父がいるから」(福岡・彌吉巧須)、「夕焼けに染まった空に空襲のあった七十数年前を見ている」(埼玉・斉藤紗良)、「打ち上がる花火の色は変われども胸に咲く花濃くなるばかり」(埼玉・北村啓太)、「嘘をつけドーナツの穴空白は誰かが

所有できるものじゃない」(大阪・藤井琉乃)、「僕の恋愛酸水のような恋君に絶対振られたくない」(千葉・大谷一馬)、「静の中勝敗決める

一音や青春捧げる競技かるた」(神奈川県・桐谷七彩)、「道端に命の尽きし法師蟬夕暮れの中土へと還す」(福岡・高松麗華)、「便利さを求め広がる」(石川社会)「忘れたくない手紙のぬくもり」

(神奈川県・福井春菜)、「放つ矢に心をこめて的を射る真夏の夜の遠い残響」(埼玉・石川幸人)、「母よりも祖母の言葉が身にしみて机に向かう

夏の始まり」(宮城・新井野乃佳)、「自由無き陳列棚の虫籠で外を夢見る甲虫かな」(千葉・畠山諒)、「不意に鳴るぜんまい切れた古時計まだ動けると伝えるように」(群馬・藤田翔流)、「人間は進化しすぎたんだよって発展途上な僕

らが語る」(福島・秀島由里子)、「晩酌の父の隣りに正座してそと差し出す進路志望書」(茨城・猪瀬美夢)、「少年は愚かであれよ永遠の二月を走る夜行バスに乗れ」(神奈川県・戸塚麗)、「冬の夜のベンチに座りぼつぼつとすき間だら

けの恋の告白」(福岡・黒野里奈)、「笑う人真顔の人に怒る人いろんな人に出会うレジ先」(神奈川県・津ノ井莉奈)などの作品に着目しました。学校単位での応募では福岡県の西日本短期大学附属高校、千葉県立安房高校の生徒に秀歌が多く、指導者に恵まれた生徒たちはとても幸せ

だなあと思いました。慶應義塾志木高校、神奈川県立横浜翠嵐高校、東海大学付属静岡翔洋高

校など、今年新たに注目した学校も多かったです。

願わくは、高校生の皆さんには今後も短歌をつくり続けてほしいと思います。短歌の魅力は一首より十首、十首より百首をつくったときにこそ見出せるものなのだと思います。たった三十一文字でも、心を込めて紡いだ一首は、時に未来を切り拓く鍵となり得るものです。他の誰とも違う、自分だからこそその一首をぜひとも見つけてください。

●田中 章義(たなか あきよし)

昭和四十五年静岡県生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業。大学一年生のとき第36回角川短歌賞を受賞。以後、「地球版・奥の細道」づくりをめざし世界を旅しながら、ルポルタージュ、紀行文、絵本など多数執筆。世界で詠んだ短歌が英訳され、平成13年国連WAFUNIF親善大使に就任。JICA「21世紀のボランティア事業を考える会」検討委員、国連環境計画・地球環境平和財団「地球の森プロジェクト」推進委員長、ワールドユースピースサミット平和大使などを歴任。短歌集の他、絵本や人物ルポルタージュなどの著述もあり、松井秀喜選手や北島康介選手の社会貢献活動を紹介した単行本も執筆。BEGINなどミュージシャンの歌詞も手掛けている。